



# えい すい 映水 さん



絵師  
(早川町)

今回は、早川町在住で県内外の寺院の天井画・壁画などの仏閣装飾画を数多く手掛け、2017年に東久邇宮文化褒賞を受賞、2018年からはやまなし大使も務められている絵師の映水さんにお話を伺いました。

本日は、お忙しいところ、ありがとうございます。映水さんは岐阜県のご出身ということですが、まずは岐阜県で過ごされた時期と大学時代のことについて、お話を聞かせて頂けますか。

**映水** 岐阜県の大垣市で生まれたんですけど、母曰く、私は絵が大好きで、お菓子の缶の中にクレヨンを入れて持ち歩き、よく庭で写生をしたりするような子どもだったそうです。中学生の頃は絵から遠ざかっていましたが、高校二年の夏に、ロサンゼルスへ短期留学をした時に知り合った美大志望の子の影響で、自分が絵を描くことが好きだったことを思い出して、「美大に行きたい」と思うようになり、両親の反対もありましたが、猛勉強の末、東京の女子美術大学洋画科に進学することになったんです。

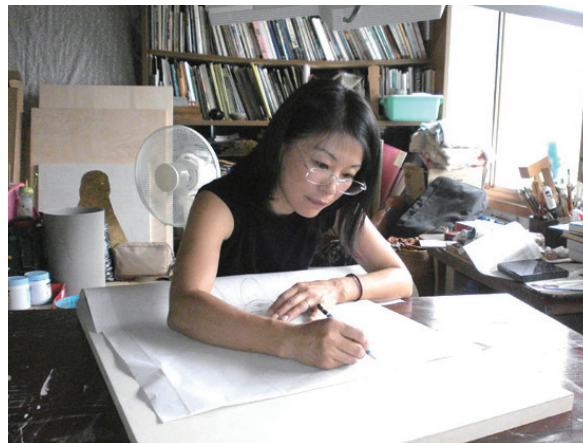
ところが、望んで入った美大なのに、これがイメージしていたのと違ったんです。私は美大専門の予備校に通っていた時のように、周りの子たちと切磋琢磨してもっと絵が描けると思っていたのに、そういった“熱”が感じられなかったんですね。教授も週に数回来て少しアドバイスされるだけで、後は講評会で並べた作品から数点取り上げてお話しされるだけ。

もっと絵が上手になる方法を知りたかった私には大学というところが向いてなかった。これではダメだと思った私は、大学二年の夏にニューヨークへ渡りました。英語学校で知り合った友だちの家をシェアさせてもらい、現地の美術館やギャラリーを巡り、芸術面で様々な刺激を受けた私は、「ここで勉強したい!」と思い立って帰国後に退学届を出しました。母は反対しましたが、父は私を後押ししてくれて「全ての責任は私がとるから、おまえはやりたいことをやりなさい」と言ってくれたんです。結局、仕方なく母も許してくれましたが、せめて成人式だけは出てほしいと言われ、成人式に出席した後、すぐに渡米しました。

苦勞して入った美大をやめられたということで、大きな決断をされたんですね。そして、憧れていたアメリカでの生活はどうでしたか。

**映水** ニューヨークでは「アート・スチューデント・リーグ・オブ・ニューヨーク」という美術家を輩出するための専門学校に入ったんです。授業や先生を自由に選択してコーディネートできる面白い学校で、生徒の年齢や国籍も様々だったのでとて

も貴重な経験でした。この間、専門を油絵からアクリル画に変更しました。でも、23歳のときに帰国するんです。実は父と「アメリカでの生活は2年まで」と約束していたのに、2年を過ぎても帰国する様子がない娘を嗜めるために仕送り<sup>たしな</sup>を止められたんです。個展やグループ展を数回やった程度で取り立てて実績もない、納得いく作品ができるほどの画力が付いたわけでもない。あと少し、もう少しと諦めきれずにいた私は期限を決めて決断することを迫られました。



映水さん

わがまま言って日本を飛び出した手前、かっこ良く帰国したかった(笑)。悔しかったし、私にとって何も経歴のない日本へ帰国するのは怖かったですね。でも、「待ってくれている人がいるうちに帰ったほうがいいのかもしれない」と思って帰国を決めました。

なるほど、志半ばでの帰国ということになったんですね。その後は?

**映水** 岐阜には帰りたくなかった私は、いとこを頼って東京の西荻窪で生活を始めました。初めは英語学校の講師をしながら、子どもに英語で絵も教えていました。筆と絵の具を使うことからどうしても離れたくなかったんですね。休みの日は、ニューヨークのルームメイトがプレゼントしてくれたネイルアートの道具を使って、爪に絵を描くこともしていました。「1本

100円で爪に絵を描きます」と看板を立ててお小遣い稼ぎのつもりで。当時はまだネイルアートが女優さんやセレブの嗜みだったので、あまり一般には認知されていませんでした。ある日、雑誌で特集されたネイルサロンの切り抜きを持ってきた人がいて、見たらネイルアートの値段が1本1500円くらいだったんです。それを見たとき、「私ならもっと絵がうまく描ける。これなら私も絵で食べていけるかもしれない。」と思いました。

その後、すぐにネイルアートの学校に通って最低限の基礎を身に付けた私は、別のネイルサロンに自ら売り込みをかけました。すると作品のネイルチップが評価され、ネイルアートデザイナーとして会社勤務することを勧められたんです。しばらくそこで勤務していると、今度はその会社がネイルスクールを立ち上げることになって、あれよあれよという間にニューヨークと日本のネイルスクールのアート専門講師になっていたんです。

2年ほど働いた後、26歳で美大の予備校時代の同級生(元夫)と結婚しまして、いずれ引越す予定だったので、お勤めを辞めて独立しました。立ち上げたネイルのお店の売上は順調でしたが、私自身は忙しかった分少し体を壊してしまいました。そんな中、結婚6年目で娘を妊娠したのをきっかけにサロンを休業しました。

### 早川町への移住や天井画を描くきっかけは？

**映水** 私が妊娠してしばらく仕事ができなくなったことで、東京での割高なアトリエの賃料を支払うのもこの先難しくなると考えた夫が、安い家賃を求めて探し出したのが山梨県の早川町だったんです。私にとっては、ニューヨークやパリよりも早川町は外国でしたね、言葉は分からないし、文化も違うし。

今住んでいるところは、赤沢で知り合った大工さんに紹介してもらったんですけど、私が天井画を描くきっかけになったのも実はこの大工さんなんです。私が描いたネイルアートの写真を見て「柵1枚5千円で描いてみないか、爪に花の絵が描けるなら、天井にも描けるだろう？」と言われて、「このチャンスを逃したら、絵描きになる夢は二度と叶わないかもしれない」と思ってすぐに快諾しました。日中は元夫の仕事の手伝いや娘の世話があり、夜中しか天井画の制作ができなかったので、ほぼ不眠不休で数ヶ月かけて制作しました。とにかく絵を描けることが嬉しくて、辛いとは全く思いませんでした。これがきっかけで他のお寺にも描かせていただくようになり、今に至る訳です。

映水さんにとって、現在も含め早川町での生活について聞かせてください。

**映水** 最初は元夫に嫌々連れてこられた感じでしたよ。小さな娘を連れての移住だったので、病院は？子どもの教育は？ご近所付き合いは？と不安しかありませんでした。でもお隣のご家族がとても良くしてくださって。彼らが居なかったらきっと途

中で逃げ出していたと思います。数年かけて集落の風習や仕事などを覚えたりしながら、ご近所さんに徐々に顔を覚えていただいて。

早川町は自然豊かで、作品を制作するうえで必要なインスピレーションをもらっています。「人は、山の動物たちと何も変わらない自然の中で生かされている命だ」という、それまで都会で生活していた時には感じたことのない謙虚な気持ちを持つようになったのも、自然災害の多い早川町で暮らすようになってからです。この気持ちは、仕事だけではなく作家活動にも大きな影響を受けています。

元夫とは離婚しまして4年前に再婚しました。彼は仏師で、とても寡黙な人です。娘も高校生になりました。色々難しい年齢なので娘の扱いに戸惑うことがあります。血が繋がっていないからか、夫は第三者的な目で娘を見ていてとても冷静。世間一般で言うイクメンではないですけど、娘との接し方についての冷静な意見やアドバイスを通して、娘との関係に気づきを与えてくれるありがたい存在です。

最後になりましたが、今後の目標や展望についてお聞かせください。

**映水** 娘は私と同じく絵の道に進もうとしていますが、とにかく楽しんでやり続けて欲しいですね。向いてるかどうかなんて30年やっている私もまだ分かりません(笑)。与えられた環境で諦めずにやり続けることはとても難しいことです。でも工夫して楽しんでやり続けていると必ず助けてくれる人が現れます。だから諦めずにやり続けて欲しい。



私については、50歳を一つの区切りとしてやりたいことを全てやり尽くそうと考えています。個展やグループ展、昨年からは始めた『写仏会』など精力的に取り組んでいますが、今年、大木記念美術家助成基金を

いただいたので、海外でのさらなる活動に向けても進行中です。

実は、先日新聞でもとりあげいただきましたが、笛吹市石和町に「大江戸温泉物語 石和温泉 ホテル新光」というホテルがありまして、ここの食堂の壁画を娘が今手掛けており、私もエントランスに龍の天井画を描かせていただくことになりました。初の親子競演です。この情報誌が発行される頃には出来上がっていると思いますので、是非たくさんの方にご覧いただければと思います。

映水 (HP・Facebook)

<http://eisui.net> (HP)

<https://www.facebook.com/eisui0220> (Facebook)